第１章　序論:研究の目的と先行研究

1.1. 本研究の目的

本研究は，日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉のあり方，その存在様式を描こうとするものである．とりわけ文の最も核心的な部分となる，文末に注目し，文末の構造体を照らし出すことで，談話の中における文はどのような姿で存在しているのか，実際に動いている談話の中にあって，１つ１つの文はどのように統合され，談話の中でどのように働いているのかといった，談話をなす文のあり方を描くことを目的とする．

こうした目的のために，異なり人数 160 名，計 80 組のソウル方言話者，東京方言話者による，一定の条件で統制された談話を収集し，組織化された談話データを構築し，分析するものである．分析の方法論的な考察も本研究を支える課題である．

〈話されたことば〉は文字とは違って，留めておくことはできず，口から発せられた瞬間，宙になびき，その形を視覚的に確認することはできない．しかし，それにもかかわらず，私たちはその形を認識し，答えたり，笑ったりというコミュニケーションを行っている．こうしたことが可能であるのは，普段何気なく口から発せられたことばは，たとえ目に見えずとも，言語学がこれまで様々な形で肉迫してきたように，おそらく何がしかの構造を成して存在しているからであろう．

実際に〈音声として話されたことば〉における文の姿を見るためには，どうしてもそこにいかなる構造で文が在るのかということを見ないわけにはゆかない．そしてそうした〈話されたことば〉における文の姿を探ってゆこうとすると，真っ先に文法，語彙，あるいは形態，統辞，そして品詞などといった概念に直面する．そうした「文法とは？」，「品詞とは？」といった定義や説明も多くの学者により述べられ，それらに基づいた，とりわけ〈書かれたことば〉を対象にした文の構造の研究や分析が数多く行われてきた．

しかし，今私たちが用いている〈話されたことば〉における文の姿は，〈書かれたことば〉に主として立脚した文法体系を用いて，どこまで分析することができるのだろうか．またどこまでその姿を描くことができるのだろうか．本稿では出発点として，主として〈書かれたことば〉に基づいて築かれている文法体系をまず土台にし，〈話されたことば〉のあり方を追究していく．シナリオなどで見られるようなことばを用いた「口語」の文法などは多くあるし，また母語話者自らの内省による「話しことば」の文法とされるものは多いが，実際に〈話されたことば〉，実際の談話から言語事実を客観的に

観察しうるものとして対象化し，そうした言語事実を根拠に組上げたといえるような文法体系といえるものは，残念ながら，未だ存在しないからである．

また，日本語や韓国語によってことばをやりとりする際の基本的な単位の１つとして文を認め，文に注目するとき，その文の中で最も核となる部分の１つは，述語が現れる文末であると言えるであろう．しかし，いま「述語が現れる文末」と言ったが，そもそも文の末尾に述語は常に現れるのだろうか．もし常に現れるわけでないとしたら，そもそも実際にはどのぐらい現れるのだろうか．文が述語で終わらないとしたら，いったいどのような構造で終わるのであろう．述語で終わらない文とは，いったいいかなる性質のものであろう．そもそも，文が終わるとはどういうことか？逆に，どのようなものを文と呼べるのであろう．こうした問いは，あるいは言語を考える上で根源的なものでもありうる問いである．こうした様々な問いを本稿の出発点とし，文が自らを終えるときの姿を捉えることで，談話における文のあり方を探ってゆくことにしよう．

〈話されたことば〉を，より生き生きと捉えるためには，１文，１文のあり方を精緻に描写してゆかねばなるまい．またそうした作業は，あるいは既存の文法体系では把えきれないものを含むかもしれない．もしそのようなことがあるとするなら，本研究は，〈話されたことば〉に固有のことがらを見据え，〈書かれたことば〉の先入観から解き放たれた，〈話されたことば〉独自の文法体系の構築への端緒を得ることができるかもしれない．同時にそれは，文法論というものの今までのあり方を顧みる契機を提供するものともなりうるであろう．頭の中で作られた「会話文」「話しことば」ではなく，どこまでも実際に〈話されたことば〉を基に，日本語と韓国語の文末の姿を明らかにしてゆくのが，本稿の目指すところである．

1.2. 本研究の展開

本研究はこれまで述べてきたような問題意識を，つぎのような順序で展開してゆくことにする．

この第１章では，まず研究の目的を述べ，本研究がいかなる問いから出発しているかを踏まえた．本研究と同じ課題を扱ったような先行研究と呼べるものはないが，本研究の問題意識と関わりのある先行諸研究を概観する一方，基本的な諸概念を確認してゆく．

第２章では，談話データの構築をめぐる様々な問題を扱う．既存のコーパスというものについて概観したのち，本研究の談話データをいかに構築するかを述べ，文字化という，談話研究に不可欠のプロセスを経るにあたって，本研究独自の方法論を提起する．このプロセスはまた，音声言語を文字言語化するという，まさに〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の間を見据える作業でもある．

第 3 章では，談話を分析するのに不可欠の理論的前提である，談話の単位の問題を論ずる．文，発話単位，turn という概念を確認することが，実は談話を見てゆく極めて重要な作業であり，そうした作業はとりもなおさず，談話を照らす枠組みの構築ともなることが，この章では見て取れるであろう．turn-exchange 論はその重要な柱である．

第 4 章では，第 3 章で文を取り巻く理論的前提を確認したのに続いて，今度は具体的に文の中身の問題へと分け入ってゆく．そこでは文末の構造体を照らすための理論的前提となる諸概念を論じる．述語があるということ，ないということを，形態論，統辞論的な観点から探り，また文末の構造体を構成する要素はどのようなものかということを，品詞論的な観点から見るプロセスを論じる．スピーチレベルや倒置といった，文の分析に必要な他の諸概念もここで確認されることになる．

第 5 章では，述語で統合されていない〈非述語文〉の出現様相を，本稿で構築した実際の談話データから明らかにする．〈述語文〉と〈非述語文〉はどのような分布で現れるのかを，様々な話者の世代別，性別など，談話の条件別に解析する．日本語と韓国語の実際の談話における文末の構造体が，文法的にはいったいどのような姿をしているのかということが，この章で明らかにされる．文が自らを終えるということの，豊かな言語事実のありように私たちは驚くことになろう．

第 6 章では，続いて〈述語文〉の文末の構造体を描く．〈述語文〉の文末がどのような構造で現れるのかが，類型化されて述べられることになろう．用言が述語として現れるリアルな様相に向き合うことになる．

第 7 章では，述語らしきものがありながら，〈非述語文〉のように働くというメカニズムを論じる．そこでは〈非述語化のデバイス〉と呼ばれる要素が提起されよう．この章は，いわば〈述語文〉と〈非述語文〉のあいだを見据える章となる．

第 8 章では，緩衝表現(buffering expression)と本研究が名づける，談話における興味深い表現について論じる．日本語と韓国語に存在する，様々な緩衝体(buffer)の構造が類型化されよう．実際の〈話されたことば〉に出現する構造体の姿が浮き彫りにされるであろう．

第 9 章では，本研究を要約しつつ総括する．

以上が本稿の展開である．

1.3. 術語の定義

実際に話された談話から，〈話されたことば〉を観察する前に，私たちは「話されたことばとは？」，「談話とは？」といった問いにまず答えねばならない．こうした問いは，当然でありかつ基本的な問いでありながらも，場合によっては研究の根本を揺るがすよ

うな決定的な問いともなりうるものである.

またそれは,「話されたことばと書かれたことばの違いは?」,「話されたことばと話しことばの違いは?」,「口語と文語とは?」といった問いへと重なってゆくであろう. ここでは〈話されたことば〉と〈書かかれたことば〉,〈話しことば〉と〈書きことば〉,〈談話〉と〈テクスト〉といった術語の概念を,先行研究の定義から確認し,比較しながら,本稿における術語の概念を確かなものにしてゆくことにする.

1.3.1.先行研究における〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉

まず,ソシュール(2003:186-237)は「言葉(パロール)とは,人々が口々に喋り合っていることの総和」であると述べ,一方で,言葉(パロール)は「話されたことば」であると明言している.また,「私たちが語っていたのは言語(ラング)の研究の追究」といい,「言語(ラング)の変化全体の根本は,言葉(パロール)によってしか達成されない」として,言語研究における話されたことばの重要性を力説している.

一方,Sapir (1921:8)は言語の定義を次のように行っている:

> Language is a purely human and noninstinctive method of communicating ideas, emotions, and desires by means of a system of voluntarily produced symbols. These symbols are, in the first instance, auditory and they are produced by the so-called "organs of speech".
> (言語とは,意図的に産出した記号の体系によって,思想,感情,または欲望を伝達するための,純粋に人間的で非本能的な方法である。これらの記号は,まず第一に聴覚的であって,いわゆる「音声器官」によって産出される.:安藤貞雄訳(1998:21)による)

また,Sapir (1921:20)は書かれたことばについては次のように述べている:

> The written forms are secondary symbols of the spoken ones——symbols of symbols——
> (書かれた形式は,話された形式の二次的な記号－記号の記号－である: 安藤貞雄訳(1998:39)による)

すなわち,Sapir (1921)は,「言語」は音声による話しことばであり,書かれたことばは話されたことばの「二次的な記号」として説明しているのである.

また,Lyons(1968:38)は書きことばを重要視していた伝統文法学者を批判しながら,次のように述べている:

The traditional grammarian tended to assume that the spoken language is inferior to and in some sense dependent upon the standard written language. In conscious opposition to this view, the contemporary linguist maintains (though with certain important qualifications which we shall introduce presently) that the spoken language is primary and that writing is essentially a means of representing speech in another medium.
(伝統文法学者というものは，話されたことばは，書かれたことばより劣等で，そしてある意味では，標準的な書きことばに従属しているものだと見がちであった．こうした見解に対する意識的な反論として，今の言語学者は（私たちがこれから紹介する，ある重要な条件づきでだが）話されたことばが主要なもので，書くということは本質的に，話すということの別の手段による表しであると主張する：引用者訳)

Lyons(1968)も Sapir(1921)同様，〈話されたことば〉を主要なものとして捉え，〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉を表わすための二次的な手段として捉えているのである．

一方，日本語と韓国語も，〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉を有している．〈話されたことば〉は「音声による言語行動」であり，〈書かれたことば〉は「文字による言語行動」として捉えられることができる．それでは，〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の具体的な違いはどうだろうか．大石初太郎(1958)は〈話されたことば〉，〈書かれたことば〉の違いを「話しことば」，「書きことば」という術語を用いて次のように述べている．その違いを整理してみれば，次のごとくである：

表 1 大石初太郎(1958)による「話しことば」と「書きことば」の相違の概略

話しことば	書きことば
音声によることば	文字によることば
相手が音声をとらえられる位置にある場合	相手が音声をとらえられない位置にある場合
時間性	空間性
相手に合わせる－他律的	自身を表現する－自律的
流動的	安定的
音声表現	文字表現
倒置や省略が多い	倒置や省略が少ない
対話の構造がある	対話の構造がない

노대규(1996:21 筆者訳)は〈話されたことば〉(口語)は，「多様性」，「即刻性」，「親密

性」，「瞬間性」，「非論理性」，「非格式性」，「状況依存性」などの性格を持ち，〈書かれたことば〉(文語)は「単純性」，「計画性」，「叙述性」，「永久性」，「論理性」，「格式性」，「文脈依存性」などをその特徴としてあげている．また， Noma (2005:66)では，日本語と韓国語のいずれをも視野に入れて，〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の違いを述べている．整理すると次のごとくである：

表 2 Noma (2005)による〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の違い(引用者訳)

話されたことば	書かれたことば
実現された音	実現された文字
「いま・ここ」のもの	「常に・まだ」(immer noch)のもの
実時間の中の線条性(linearity)	時間的な可逆性
自らの直前で消える存在	自らの目前にのみ存在
他律的(heteronomous)	自律的(autonomous)
即目的(an sich)	対目的(für sich)

1.3.2. 先行研究における〈談話〉と〈テクスト〉

〈談話〉と〈テクスト〉といった術語は言語学者によって異なる意味で用いる場合が多々あり，何を指しているのか曖昧になることがある．学者によって，話されたことばと書かれたことばの長い一まとまりの単位を区別せずに談話と呼んだり，テクストと呼ぶこともある．また，2 つを区別して話されたことばの一まとまりを談話と呼んだり，書かれたことばの一まとまりをテクストと呼ぶ学者もいる．

例えば，Goffman(1981:124-327)は「written text」(書かれたテキスト)と「spoken discourse」(話された談話)を区別しており，さらに談話は「interaction the roles of speaker and hearer」(話し手と聞き手の相互作用)であると述べている．また，Halliday & Hassan (1976:1)は，話しことばでも書きことばでも「どんな長さでも統一された全体を構成している一節」をテクスト(text)と呼んでいる．

Van Dijk (1977:3) は，一般に談話(discourse)と言われる，文の複合(compound sentences)はテクストであるという．談話は，独話(monologue)ではない，異なる話者(different speakers)が構築する(dialogue discourse)コミュニケーション(communicative action)であり，テクストは談話の構造物であると述べている．

Crystal (1980:354) は，書かれたことばや話されたことばの集合体をテクスト(text)と呼んでいる：

What is important to note is that texts may refer to collections of written or

spoken material, e.g. conversation, monologues, rituals, and so on.
(注目すべきことは，テクストとは，書かれた，あるいは話された素材の集合体，たとえば会話や独話，儀式での講演などを指しうるということである:引用者訳)

Crystal(1980:115)は，一方で談話(discourse)は話されたことばの発話の集合として捉えている：

At its most general, a discourse is a behavioural UNIT which has a pre-theoretical status in linguistics: it is a set of UTTERANCES which constitute any recognizable SPEECH event, e.g. a conversation, a joke, a sermon, an interview.
(その最も一般的な意味において，談話は言語学においては，理論以前の段階を有する行動の単位である：それは対話，冗談，説教，インタビューなど，認識可能な話しことばを構成する，話すというできごとの発話の集合である:引用者訳)

すなわち，テクストは実質的には話された談話を含みうる，より大きい単位としても用いる術語と見ているのである．一方，Hoey(1979)は discourse (談話)という術語を書かれたことばを指して用いている．

日本語では，久野暲(1978)は，研究者が作り出した文など，書かれたことばによる文を題材にして「談話」を論じている．野田尚史(2002:120)が談話に関して「これらの音声言語の単位が複数まとまって，談話という日本語の話し言葉によるコミュニケーションの唯一の実現形態を成立させる」と述べ，談話を話しことばの実現形態として位置づけている．メイナード(2004:2)は，「話し言葉も書き言葉も含めて談話という表現を用いてきた」とし，その理由を詳しく述べている．それは「言語の実際を区別してみると，いわゆる書き言葉としての文章と，話し言葉としての談話の区別がつけにくい場合が多い」からであると，それぞれの表現のしかたを根拠にしている．これに関しては次項の1.3.3.でもう一度言及する．

日本語と韓国語を扱った，野間秀樹(2003)は書かれたことばの一まとまりをテクストと呼び，話されたことばの一まとまりを談話と呼び，区別している．

1.3.3. 本稿での話されたことばと談話，書かれたことばとテクスト

以上，話されたことばと書かれたことばの概念とその違い，談話とテクストの概念とその違いを先行研究から検討してみた．

ここで私たちが必ず区別すべき問題がある．〈話されたことば〉と〈話しことば〉，〈書

かれたことば〉と〈書きことば〉の違いである．上の先行研究でも検討したように〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉は，言語が〈音声として存在するのか〉，〈文字として存在するのか〉といった，言語が存在する姿，存在様式として取り扱うべき問題と考えるべきである．これに対して，〈話しことば〉と〈書きことば〉は言語表現の問題，文体の問題なのである．例えば，「ッテカンジデ」などといった表現は〈話しことば〉の文体であり，「ノヨウデアル」といった表現は，〈書きことば〉の文体として考えるのである．〈話されたことば〉，〈書かれたことば〉はどこまでも言語の物理的な存在のしかたを言うのであって〈話しことば〉の文体で〈書かれたことば〉もあれば，〈書きことば〉の文体で〈話されたことば〉も存在するのである．

従って，〈談話〉と〈テクスト〉は，言語の存在様式である〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉によって区別される問題であり，〈話しことば〉と〈書きことば〉といった言語表現，文体の違いで区別する問題ではない．

メイナード(2004:2)は，「小説の会話部分」や「インターネット上のBBSやチャット」，また「ッテカンジ」などの言語現象などを例に挙げ，「いわゆる書き言葉としての文章と，話し言葉としての談話の区別がつけにくい」と指摘している．これはすなわち，話しことばと書きことばの表現上，文体上の密接な関係についての指摘である．書きことばを表わすのに，いわゆる話しことば，つまりいわゆる文章を書くのに用いるとされるような表現ではなくて，「口語」の文体を用いる，言語の存在様式の問題ではなく，ことばの文体の問題なのである．〈話しことば〉を〈書きことば〉として用いることに関する，メイナード(2004)の指摘は当然のことでありながら，その表現上，文体的な違いを持って〈談話〉と〈テクスト〉を区別するかのような指摘は，〈話されたことば〉と〈話しことば〉，〈書かれたことば〉と〈書きことば〉の本質を見誤りかねない誤解を招くといわざるを得ない．「小説の会話部分」や「インターネット上のBBSやチャット」などの〈話しことば〉が文体として〈書かれたことば〉で現れる場合，言語の存在様式はどこまでも〈書かれたことば〉であり，台本が用意されている演説や講演，演劇，朗読などの書きことばが話されたときは，それは物理的に〈話されたことば〉として存在するのである．

Goffman(1981:162-195)は，講演について「聴衆をある程度想定した所定のテキスト(predetermined text)を用いながらも，講演者の性別，年齢，社会的地位，話し方により，聴衆と直接的な相互作用を行うことで理解を求める」のであると述べている．またGoffman(1981:320)は，1人で話すラジオ放送について次のように述べている：

the speaker will render his prepared text with faultless articulation, pronunciation, tempo, and stress, and restrict himself entirely to the copy.
(話し手は，間違いのない調音，発音，速度，そして強勢といったものをもって自分の用意されたテクストを造り変え，そして彼自身をひたすら複製に自らを限定する：引用者訳)

Goffman(1981:197-327)はテクストが用意されていても，1人のラジオ放送では，「'uh' などの間つなぎ発話や，言い間違い，それの修正，ことばの交代，繰り返し」などが見られ，2人以上の会話では「重複，割り込み，あいまい性」などが見られると述べている．すなわち，元来は〈書かれたことば〉であっても，それが一旦話されるという形をとるやいなや，そこでは〈話されたことば〉として存在するのである．

〈書かれたことば〉[1]は，それぞれの書かれた言語が持っている，いわゆる文法，すなわち一定の規則により，規則的に整理されているという特徴を持つと言える．そして，読み手が現れるまで物理的な文字という形で，意味を持たないまま，常にそこに記号としてのみ存在するものである．読み手が現れてこそ，その読み手によってはじめて意味を持つテクストになり，読み手が現れなければ，意味のない記号の羅列に過ぎないものとして在りつづける．

〈話されたことば〉は，言語が持つ構造や形式と意味を保った上で，唐突な挿入，倒置，いい間違いやその修正，繰り返し，付け足し，割り込み，口ごもり，あいづちなどを含めた豊富な言語現象が，自由に現れる．そして音声による言語表現である点は，〈書かれたことば〉と最も異なる点であるといえる．両者のもっとも大きな違いは，〈話されたことば〉にこそ際立つ，時間とともに瞬間的に消え去る，線条性にあるといえよう．〈書かれたことば〉は，時間が経っても文字は物理的な限界にまで残り，そのあり方を視覚的に捉えることができる．

朗読やニュース，講演など，〈書かれたことば〉が〈話されたことば〉として現れるとき，上にあげた〈話されたことば〉の特徴は軽減されるにしても，それはどこまでも〈書かれたことば〉そのものではなく，音声言語である〈話されたことば〉として存在するのである．そして小説の会話文やシナリオ，チャットでの会話などは言語表現が話しことばの文体で現れているとしても，それが文字の形で存在している以上，〈話されたことば〉としては存在せず，〈書かれたことば〉として存在する．

---

1 野間秀樹(1990:2-3), Noma(2005)参照．書かれたことばは読み手によって，はじめて意味を持つテクストとなると考えうると述べている．

さらに，〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の，こうした本質的な違いに目を向けるのであれば，両者を共に 1 つのカテゴリーに入れるのではなく，〈話されたことば〉の集合体，即ち〈談話〉と〈書かれたことば〉の集合体，即ち〈テクスト〉という区別されたカテゴリーの中で言語研究は行われるべきであろう．

本稿と最も近い見解を述べている，Noma (2005)の〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の違い， 野間秀樹(2003)の談話とテクストの定義に従い，本稿では，次のように〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉，〈話しことば〉と〈書きことば〉，〈談話〉と〈テクスト〉の定義を行う：

話されたことば：音声による言語表現．音声としての存在様式を有することば．
書かれたことば：文字による言語表現．文字としての存在様式を有することば
談話　　：話されたことばの一まとまり．
テクスト　：書かれたことばの一まとまり．
話しことば：話されたことばに主として用いられる表現や文体．
書きことば：書かれたことばに主として用いられる表現や文体．

このように定義した上で，さらに詳細に見てゆくならば，ニュースや朗読，演劇など，書かれたことばを直接的な前提にした話されたことばと，私たちが日常生活で，人と人が出会って行う話されたことばは，また異なるものとなろう．談話は行われる性質の違いによりまた下位分類が可能である：

表 3 談話の下位分類

談話		
自由会話	主題会話	準談話
・予め用意された書かれたことばによるテクストを持たない． ・主として日常生活の個の場に現れる． ・話し手と聞き手が直接出会って相互作用によって行われる．	・予め用意された書かれたことばによるテクストを持たない． ・予め話す主題が用意されている． ・話し手と聞き手が直接出会って相互作用によって行われる．	・予め用意された書かれたことばのテクストがある． ・多く公の場に現れる． ・話し手と聞き手の相互作用(face to face interaction)を含まない，ニュースや朗読，演劇などの話されたことば．

書かれたことばのテクストによる話されたことばを本稿では〈準談話〉と分類する．また，ほめることや依頼することなどあらかじめ主題が用意されている話されたことばを〈主題会話〉と呼び，〈自由会話〉とは区別する．あらかじめ主題が決まっている会

話ではなく，人と直接会って，決まった主題なしで自由に話し合う会話のことを本稿では「自由会話」と呼ぶ．〈準談話〉は書かれたことばに最も近く，〈自由会話〉は話されたことばの自然さを最も素直に捉えられるものとして考えられる．直接会わず，たとえば電話などの媒体を用いるという制限が加わっている会話は本稿の談話の下位分類には含めないでおく．本稿が描こうとする談話の姿は，上の〈自由会話〉の姿である．本稿が行う〈談話分析〉は〈自由会話〉による話されたことばの分析である．

また，〈口語〉と〈文語〉という術語は日本と韓国では，一般的な用いられ方が異なっている．口語は日本語も韓国語もいわゆる〈話しことば〉を指すが，文語は日本語では〈古語〉を指し，韓国語では〈書かれたことば〉を指す．また，「口語体」，「文語体」という術語は，書きことばの領域のもので，書かれたことばの文体を指す術語として捉える．それゆえ，口語体で書かれている小説やシナリオなどもどこまでも書かれたことばの領域のものであり，そうした小説やシナリオ[2]は決して話されたことばの代わり[3]にはなれないし，話されたことばそのものではないと考えるのである．

1.4. 先行研究：一連の言語学研究の流れ

本章では構造言語学からはじめ，談話分析の研究にいたるまでの，本稿と関わりある一連の言語学研究の流れを照射してみる．数多くの研究が存在するが，ここではある研究の一線を画したとみなされる研究者と，その理論を中心に言語学研究の流れを描く．

1.4.1. 文法と談話

言語の「音の構造」や「文の構造」を究明しようとする構造言語学は，20 世紀初頭から言語学研究の大きな流れを成していた．そうした構造言語学の先駆者として先に言及したソシュールが挙げられる．新たに編まれたいわばもう 1 つのソシュールともいうべき，ソシュール(2003:23,186)[4]は，「言語(ラング)」と「言葉(パロール)」を次のようなものとして述べている：

言語(ラング)　：「声音記号とその観念との結合」であり，「社会的産物」

---

2 野間秀樹(1996a:96)では，小説やシナリオなどで見られる会話文，すなわち書かれた文体の会話体を「擬似会話体」と呼んでいる．

3 大石初太郎(1958:51)は「談話体の書きことば，たとえば，小説，脚本の会話文などは(中略)目的によっては，それらを資料として話しことばについて考えることも許される」と述べているが，本稿は，小説，脚本の会話文も書かれたことばであり，話されたことばの一種としては捉えられないものであると考える．

4 『一般言語学　第三回講義　エミール・コンスタンタンによる講義記録』(2003)による．

言葉(パロール)：a) 個的な組み合わせであり，文であり，個の意志に依存し，また個的な思惑に応じるもの

b) 発話の行為とは，それらの組み合わせの実践であり，同じく意志的なもの

また，言葉(ランガージュ)を言語(ラング)と言葉(パロール)」に区別しながらも，２つの相関関係に対してもソシュール(2003: 237)は次のように力説している：

> 言語(ラング)の変化全体の根本は言葉(パロール)によってしか達成されないのです。どんな種類の変化でも，多数の個によって試みられる〈(観測気球 ballons d'essai)〉なのです。集団に受け入れられるようになった時にしか，言語(ラングィスティック)なるものとはみなされません。誰も(個的なものである言葉(パロール))を考慮したりしません。というわけで，変化は，いつも言葉(パロール)の出来事から始まります。(中略)
> 言語(ラング)の異変的な出来事の原因は，言葉(パロール)の出来事の中に隠されています。(原文ではかっこ内はふりがな)

そして，ソシュール(2003:187)は，「言語(ラング)の研究の追究」へ進むべきであると述べている．こうしたソシュールの言語(ラング)の研究，すなわち言語の文法や音変化などの社会的な約束事の研究が，構造言語学へ繋がるものとなったといえる．亀井孝他編(1996）によれば，「アメリカ構造言語学の始祖でもある」のは，Sapir(1921)とBloomfield(1933)である．Sapir(1921)は語形成の手順といった外形的な特徴だけではなく，統辞的な特徴に目を向け，言語類型論を展開した．Bloomfield(1933)の研究は，音論はもちろん，とりわけ形態素に力点を置いて論を展開している．また，文のタイプ(sentence-types)，構造(construction)，代用(substitution)といった文法形式や，内心構造，外心構造といった構造のレベルなど，今日の文法研究にも大きな影響を与える学説を発展させ，構造言語学の中心となった．Sapir と Bloomfield は，聞き書きによる実際の言語資料を観察の対象としている点を特徴として上げうる．

こうした流れに対して，チョムスキー(1957:15)は次のように述べ，ソシュールをはじめとする Sapir と Bloomfield などの流れに反対する：

> First, it is obvious that the set of grammatical sentences can not be identified with any particular corpus of utterances obtained by the linguist in his field work. Any grammar of a language will *project* the finite and somewhat accidental corpus of observed utterances to a set (presumably infinite) of

grammatical utterances. In this respect, a grammar mirrors the behavior of the speaker who, on the basis of a finite and accidental experience with language, can produce or understand an indefinite number of new sentences.
(第一に，一連の文法的文は言語学者がその実地調査[field work]において得た特定の発話資料と同一にはできないことが明らかである。一つの言語の文法は有限で偶然的な観察によって得られた発話の資料を一連の文法的発話に投影[project]するであろう。この点においては，話者が言語についての有限で偶然的な経験を基にして，無限の新しい発話を作り出し，または理解する行動を文法はうつしている：勇康雄訳(1963:3))

そして，言語の普遍的，一般的理論を求めた，生成(変形)文法を展開させる．

チョムスキー(1957:13)は言語資料を「作り出す」話し手の潜在的な〈言語能力〉を，数学の公式のように明示的(explicit)な規則の形で示そうとした：

L なる言語の言語分析において，L の文をなす文法的な連鎖を L の文をなさない非文法的連鎖より区別し，その文法的連鎖の構造を研究する．L の文法はかくして，L の文法的連鎖をすべて生み出し，一方非文法的なものは一つも生み出さないところの装置といえよう．L に対して提案される文法の適格性をテストする一つの方法は，それによって生み出される文が実際に文法的であるかどうか，すなわち native speaker にとって受けいられるものかどうかをしらべてみることである．：勇康雄訳(1963:2)

チョムスキー(1957:106)は「文法的な文を他の文法的な文にかえる一連の変形を発見」することを主な方法にし，文法の規則に従えば，無数の文を作り出すことができるという．また，「文法は自立的なもので意味とは別のもの」といい，「文法は意味論とは個別の独立した研究」として扱った． チョムスキーのみならず，構造言語学では，言語の類型を形式の上で取り上げており，言語における意味の部分は離れたところに存在したのである．

生成文法誕生後，さらに統辞論と意味論の一体化を図ろうする生成意味論が展開される．一方で，意味論や哲学の研究者たちは〈発話〉に目を向けるようになる．

1.4.2. 発話行為と談話

言語学の研究は，物理的な文の構造を究明しようとした統辞論から，文の意味を問う意味論へ，形式から，さらに意味，コンテクストを取り込む研究へと範囲を広げていく．その中でも哲学の分野におけるオースティンとサールの「発話内行為」，グライスの「会話の含み」に関わる学説は語用論という新しい研究分野を生み出した．

オースティン(1962,1978: 164-173)は「発言を行うことがとりもなおさず，何らかの行為を遂行することであり，それは単に何ごとかを言うというだけのこととは考えられない」と述べ，そうした文を「行為遂行的発話」，あるいは「遂行文」と名づけた．そしてこうした考えは「何ごとかを言う」という「発話行為(locutionary act)」の理論と，何かを言いつつ行っている別な行為の遂行である「発話内行為」，すなわち「発話内の力(illocutionary force)」といったことを述べていた．

オースティン(1962)の「発話内行為」は，彼の弟子の著作である，サール(1969)により，より発展させられた．オースティン(1962)が意味する発話行為と意味の効力である発話内行為を区別したように，サール(1969:29)は命題行為と発話内行為を区別している：

> The expression of a proposition is a propositional act, not an illocutionary act.
> (命題を表現することは命題行為(propositional)であり，発話内行為ではない：坂本百大・土屋俊訳(1986:50))

そしてサール(1969:54-71)は，発話内行為が欠陥を持つことなく遂行されるための必要でかつ十分な条件，すなわち「propositional content condition (命題内容条件)」，「preparatory condition (事前条件)」，「sincerity condition (誠実性条件)」，「essential condition (本質条件)」など，発話内行為の成立条件を確立しようとした．また，表面上の言語形式とその背後にある意味から生じる，「polite turns of phrase(丁寧な言い回し)」のような間接発話行為を提示している点も注目すべきである．

オースティン(1962)が，意味と効力の関係を捉えたのに続き，グライス(1989)は実際に表現された意味から含意された意味への理論を展開させた．グライス(1989:25-59)は，発話の意味を，発話それ自体の意味ともう 1 つの意味，すなわち「conventional meaning(習慣的な意味)」と「nonconventional implicatures(非習慣的な意味)」に分け，「非習慣的な意味」を「会話の含み(conversational implicature)」と呼んでいる．そして「会話の中で発言するときには」，「Quantity(量)，Quality(質)，Relation(関係)，Manner(様態)」のカテゴリーの中で「当を得た発言を行う」べきであると述べ，「協調の原理(Cooperative Principle)」を提示している．「慣習的意味」は場面のいかんを問わず，常にある決まった意味で伝えられるものとして捉えられ，「会話の含み」は文脈によって伝える意味が変わるものとして捉えられる．

こうした，発話が行為になるというオースティン(1962)の理論と，サール(1969)の間接発話行為，グライス(1989)の会話の含みなどの諸理論はその後，語用論発達の大きな基盤となり，言語の意味と機能に対する研究は一層の広がりを見せるようになった．

1.4.3. 語用論と談話

こうした哲学的な議論をも Levinson (1983)と Leech (1983)は，Pragmatics[5] (以下，プラグマティクス) の名で言語学の中に位置づけた．

Levinson (1983:21)は次のように“pragmatics”の定義を行っている：

> Pragmatics is the study of the relations between language and context that are basic to an account of language understanding.
> Here the term **language understanding** is used in the way favoured by workers in artificial intelligence to draw attention to the fact that understanding an utterance involves a great deal more than knowing the meanings of the words uttered and the grammatical relations between them.
> (プラグマティクスは言語と文脈(context)の間の諸関係の研究であり，その関係が言語理解を記述するうえでの基本である．ここでの**言語理解**ということばは人工的知能を研究する学者が好んで用いることばであり，ある発話を理解するということは，語られた単語の意味やそれらの間の文法的な諸関係を知るということを，はるかに超えたものを内に含むのだという事実に，目を向けるために用いられているのである：引用者訳)

Leech (1983:11)は「General Pragmatics(一般語用論)」を「Socio-Pragmatics(社会語用論)」と「Pragmalinguistics(語用言語学)」に分けて説明している．前者は「違った文化や違った言語社会，異なる社会的場面，異なる社会階層，などにおいて違った形で働く(池上嘉彦・河上誓作訳(1987:15))」言語使用に関する研究であり，後者は「ある特定の発話内行為的な行為を伝えるために，その問題となる言語に用意されている特定の手段を考察する部分(池上嘉彦・河上誓作訳(1987:15))」の研究であると述べている．

このことから見ると，「社会語用論」は社会言語学寄りの研究であり，「語用言語学」は文法などを扱う言語学寄りの研究であるといえる．

Brown & Levinson (1987)の「politeness theory (ポライトネス理論)」や Sperber & Wilson (1988)の「relevance theory」(関連性理論)などから，プラグマティクスの研究は一層の進展を遂げるようになったといえる．こうしてプラグマティクスはさらに理論化され，言語学の中でも確固たる位置を占め，数多くの研究がなされている．

統辞論が形態素や単語のつながり，一言でいって文の構造を主たる研究対象とし，意

---

[5] Pragmatics は，一般に日本語では「語用論」と訳され，韓国語では「話用論」と訳されている．本稿ではプラグマティクスと表す．

味論は，単語が言及する対象や文や句の意味の解明を主な研究対象としたと言えるなら，語用論は話し手と聞き手，対話が行われる場なども考慮に入れ，言語の意味と言外の意味などを主な研究対象としていると言える．

1.4.4. 日本語と韓国語における談話分析

日本語における談話分析の研究は，数多く行われている．とりわけメイナード(1993, 1997,2000,2004)は，会話の構造やあいづち，ディスコース・マーカーなどに関する数々の研究を行い，日本語の談話分析を言語学の中に位置づけるほど多くの実績を残した．また，堀口純子(1997)，水谷信子(1983,1988,2001)などにより，とりわけ日本語の談話において最も重要な役割を果たす「あいづち」の機能や用法などが深く掘り下げられた．ザトラウスキー(1993)，好井裕明・山田富秋・西坂仰編(1999)，茂呂雄二編(1997)などでは，ターンテイキングや割り込みなど談話の構造や構成の研究が行われ，田窪行則編(1997)などでは，人称や呼び方，会話スタイルの及ぶ研究結果が報告されている．宇佐美まゆみ(1995,2002)は初対面におけるスピーチレベルシフトを報告している．茂呂雄二編(1997)，高原脩・林宅男・林礼子編(2002)などは，発話の型や談話のリズム分析，コミュニケーションにおける相互行為などと関連した研究を扱っている．

日本語と韓国語の対照研究においては，若い研究者による，学会での発表は非常に盛んになってきているが，論文や書物の形で公刊されているものは少ない．任栄哲・李先敏(1995)，李善雅(2001)，金珍娥(2004a)などのあいづち発話における対照研究や，金志宣(2000)，金珍娥(2003)などによる，話者交代や割り込みなど談話の構造や構成における研究，金珍娥(2002)などによるスピーチレベルシフトの研究などがある．また，秦秀美(2002)の感謝の言語表現に関する研究や金庚芬(2005)のほめと返答に対する研究金美貞(2005)の接客言語行動に関する研究のように，言語行動を中心とする研究も行われている．

韓国語の談話分析研究においては，오승신(1997)や이원표(1999,2001)などにより，談話のマーカーや話者交代，割り込みなど談話の構造や構成の研究が行われている．また軍隊での特殊な集団の敬語法を談話の中で分析した이정복(2001)などの研究がある．

日本語についての談話分析の研究は，大量の書物の形で公刊されているのに対し，日本語と韓国語の対照研究と，韓国語についての研究は，その数は非常に少なく，はるかに遅れていると言わざるを得ない．本研究が日本語と韓国語の対照研究を中心に据える所以である．

1.5. 本稿の研究の対象

以上，ソシュールの言語学からはじめ，今の談話分析の研究にいたるまでの言語学の流れを振り返り，簡単に整理してみた．〈話されたことば〉を用いた研究は，〈書かれたことば〉を用いた研究に比べれば，量的にも圧倒的に少なく，その歴史も遥かに短い．しかし，〈話されたことば〉を用いた分析を通じて，とりわけ日本語と韓国語の談話の構造や構成，談話の結束性などを示す談話マーカー，談話において重要な役割を果たす，フィラー(間つなぎ言葉)やあいづち発話など，〈書かれたことば〉の研究では取り上げられなかった談話の諸要素が明らかにされているのである．

こうした先行研究を踏まえて，本稿が研究対象とするものと，それを取り上げる方法を述べたい．まず，プラグマティクスの研究方法としては，談話分析と会話分析を挙げうる．ここでは，その２つの概念の区別から行うこととする．

1.5.1. 談話分析と会話分析

〈談話分析〉と〈会話分析〉という術語の概念を，Levinson (1983)と Leech (1983)による定義から検討してみる．

Levinson (1983:286,287)は談話分析と会話分析を区別し，次のように述べている：

> Discourse analysis (or DA) employs both the methodology and the kinds of theoretical principles and primitive concepts typical of linguistics. It is essentially a series of attempts to extend the techniques so successful in linguistics, beyond the unit of the sentence.
> (談話分析は言語学の特有の理論的原則と元素的概念を用いる．これは言語学で用いられる成功的な分析記述を文の単位を超え，拡大適用しようとする試みである：引用者訳)
> conversation analysis (or CA), (中略) is a rigorously empirical approach which avoids premature theory construction. The methods are essentially inductive; search is made for recurring patterns across many records of naturally occurring conversations, in contrast to the immediate categorization of restricted date which is the typical first step in DA work.
> (会話分析は早急な理論の構築を避ける徹底した実験的接近方法である．方法は本質的に帰納的なものである；DA の作業における典型的な第一段階である最初の段階で制限された資料の直接的な範疇化が先行される反面，CA では自然に行われる会話の多くの記録を検討し，反復的な形を求める：引用者訳)

また，Leech (1983:4)は，談話分析と会話分析，そしてプラグマティクスを同等のレベルの研究分野として立てている：

> Text linguistics and discourse analysis have refused to accept the limitation of linguistics to sentence grammar. Conversational analysis has stressed the primacy of the social dimension of language study. To these developments may be added the attention that pragmatics has given to meaning in use, rather than meaning in the abstract
> (テクスト言語学と談話分析は，言語学を文レベルの文法に限定することの受け入れを拒絶した．会話分析は，言語研究の社会的次元というものの第一義性を強調した．このような発展にさらに加えうるものとして，語用論においては，抽象的な形での意味よりも現実の用法における意味というものに注目が向けられてきた：池上嘉彦・河上誓作訳(1987:5))

いずれにせよ，談話分析は文レベルを超え，談話レベルで文法などの言語学研究を行うもので，会話分析は社会言語学的な側面から会話の構造や構成を見るものとして捉えられている．

会話分析はサックス，シェグロフ，ジェファーソンなどのエスノメソドロジー(ethnomethodology)の研究者たちにより進められた．Schegloff & Sacks (1973), Sacks, Schegloff,E.A. & Jeferson (1974), Schegloff (1982), Schiffrin (1987)などの多くの研究で，話者交代(turn-taking)，割り込み，沈黙，フィラー(filler)，あいづち(backchannel)，隣接ペアなど，会話の構造と構成(organization)にかかわる研究が行われてきた．また Tannen(1984)は，会話の参加の仕方やその仕方の表現やストラテジーなど，「conversational style」(会話のスタイル)を中心に述べている．

しかし，談話分析の研究においては，Levinson (1983)と Leech (1983)も上で言及しているように，文単位を超える言語学研究であるため，会話分析のように実際の話しことばを用いた，Schegloff(1982), Schiffrin(1987)のような研究も多いが，Sinclair & Coulthard (1975), Van Dijk (1977), メイナード(2000,2004)のような，書きことばによる研究も多く存在している．

例えば，Stubbs(1983:13)は，「(a)単一の文，(b)言語学者によって作られた文，(c)文脈から切り離された文，を扱わない研究はすべて「談話分析」と称してよい」と述べている．しかし，Stubbs(1983:13)は，上記の(a)，(b)，(c)の性格のものでも，例えば「発話行為理論に関する文献の大部分」は談話研究であると言及している．「発話行為理論に関する文献の大部分」というのは，上記の例の中で，(b)言語学者によって作られた文，(c)

文脈から切り離された文などが含まれるものと考えられる.

談話分析は，本稿が区別している，テクストと談話を合わせて言う場合が多いのである.

1.5.2. 本稿における談話分析の概念と対象

本稿ではLeech (1983)が言う，談話分析の研究，会話分析の研究，プラグマティクスの研究をすべて含めて，〈談話分析〉と言うことにする.

プラグマティクスは言語理論として捉え，談話分析と会話分析はその理論を実践するための方法論として捉える立場をとる.

プラグマティクスは，言語とコンテクスト[6]の関係の研究であり，社会言語学の側面，すなわち文化や言語社会，社会的場面，社会階層，年齢や性別などの社会的属性などによって異なる形で働く言語使用に関する分野でもあるといえる.

談話分析と会話分析は，社会的場面や文脈の中で話し手と聞き手の相互作用により行われる談話を，言語研究の対象としている点では同様である．しかし，会話分析という名称は，民族誌学の研究者たちにより進められた研究の印象が強いゆえに，会話の構造や構成といった内容に限定され，談話における言語研究の内容が狭くなっているような印象を抱かされる．本稿は談話の中で，談話の構造や構成のみならず，言語学の全般を扱える，より広い範囲の言語研究を求めており，そうしたイメージは〈談話分析〉に最も近い．しかし，こうした研究を最適に行うためには書かれたことばよりも，実際の会話から得られた話されたことばにその根拠を置く必要がある．また，Stubbs (1983:13)が挙げている(a)，(b)，(c)といったタイプの文は，本稿では談話としては認めない立場をとる.実際の会話から得られていない，作られた文は，文脈から捨象された文であり，話者の社会的諸条件や文脈と切り離された文は〈談話〉とは捉えないからである.

実際の会話資料を研究に利用している理由についてクルタード(1999:101)は，「社会学者として社会的相互作用の詳細を「厳格に，実証的に，かつ形式的に明確な方法で」処理すべく，「自然主義的観察研究」を達成するため」であると述べている.

本稿では，書かれたことばによる一まとまりは「テクスト」[7]として扱い，本稿における談話分析は，話されたことばの実際の会話から得られた話しことばによるものとする.

---

[6] 「コンテクスト」は，「言語的コンテクスト」と「非言語的コンテクスト」に分けうる．(亀井孝他(1996)参照.) 本稿での「コンテクスト」は「非言語的コンテクスト」を指すもので，〈話者が置かれている状況や場面，社会的，もしくは文化的背景〉を意味するものとして用いる．ちなみに「文脈」は〈一まとまりの談話の流れ〉を意味する「言語的コンテクスト」という術語として用い，「コンテクスト」と「文脈」を区別して用いることにする.

[7] 本研究の 1.2.3 の項を参照.

方法論の上でも，「DA では最初の段階で制限した資料の範疇化が先行される反面，CA では自然に行われる会話の多くの記録を検討」すると Levinson (1983)も述べている通り，会話分析の民族誌学の研究者たちが行っている会話収集の方法は，会話の参加者がいるところで会話を録音し，分析するといった方法である．

しかし，プラグマティックスの言語研究を社会的な性格まで含めて綿密に行うためには，あらかじめ，話者の社会的場面や社会的属性などを分類し，制限した上，言語データを収集することが談話分析の必須条件であると本稿は考える．話者の属性による言語使用の違いが把握できないと，意味のある話しことばの言語研究はできないからである．〈誰のことばか〉という命題は言語研究にとっては決定的なものである．

本稿は〈談話分析〉という名の基，実際の会話の話しことばのデータを用い，人々はどのような発話でコミュニケーションを実践するのか，どのような方法と構造で談話を構築していくのか，ということを詳細に検討し，プラグマティクスの研究，言語学の研究を実践していこうとするものである．

1.5.3. 談話分析と文法研究の統合

とりわけ，日本語における談話分析の研究は大きな発展を遂げ，話しことばにおける様々な研究結果を出している．しかし，未だ明らかにされていない課題は多い．その中で，今最もその必要性を強く感じるのは，談話分析と文法論との統合された研究である．

これほどの隆盛を見せているにも関わらず，談話分析の研究の中で文法的な観点を取り入れて行っている研究はほとんどない．また〈談話の文法〉などという研究はそのほとんどが，文脈から捨象された文，研究者が作り出した文，単一の文を用いており，実際の〈話されたことば〉，〈談話〉という一連の動的な流れを視野に入れた文法研究はないに等しい．談話分析を行う研究者の多くが，既存の文法研究の成果を取り入れず，話し手と聞き手の相互作用による談話であることを強調しながら，もっぱら談話における発話の機能や総体としての談話の構造に言及している．

文法家はまた，談話分析の研究が伝統的な言語学の基本を扱っていないと言わんばかりに，軽視している風潮があり，談話分析の研究方法を文法の研究には取り入れようとしない．いや，文法研究にきちんと取り入れられるに足る，談話分析の成果が稀薄だったと言えるかもしれない．

しかし，ソシュールの言語学の原点に戻って考えてみたい．パロールとラングは区別されるものであっても，切り離すことはできないものである．パロールを個人が実際に話した〈話されたことば〉として考え，ラングを社会的言語規範に沿った〈文法〉の現れとして考えるなら，これら 2 つはまさにそのつながりこそが研究されるべきであり，

それでこそ人間が用いる言語の全貌へと少しずつ近づくことができるのだともいえる．片方に傾いた研究から両方に支えられる研究への方向転換が必要ではないだろうか．

本研究は実際に話された談話を用いて，その談話を成す，1つ1つの文を文法的に分析することで，パロールはどのようなラングで支えられているのか，ラングは，実際はパロールの中でどのように現れているのか，といった言語の姿の根本に迫ろうとするものでもある．